

特集PART2 Inter BEE 2009プレビュー

音と映像と通信のプロフェッショナル展「Inter BEE2009」が11月18日から20日まで幕張メッセにて開催される。(主催：社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)。後援：日本放送協会 (NHK)、社団法人日本民間放送連盟 (NAB-J)。)

映像伝送機器を扱う出展社を中心に話を聞いて見たところ、「地デジ化に向けた製品をアピールするイベントとしては最後の機会」、「地デジのインフラが整った後に活用されるソリューションを検討しているユーザが増えているので、そこら辺をアピールしていきたい」といった意見が多かった。

また、経済の状況から来場者の減少を懸念する声もあるが、新製品が初公開される点や、海外の放送機器展で人気のあった製品およびデモンストレーションを日本で見る点ができる点が注目されており、「一般的に海外出張が制限されている傾向にあるので、相対的にInter BEEに対する期待が高まっている」という認識を持つ人が多いようだ。

特集では、映像伝送機器を中心に、注目の製品、ソリューションをご紹介します。

●コスミックエンジニアリング

コスミックエンジニアリングは、放送業務用 映像・音声機器、制御用ソフトウェア、文字発生装置を自社開発製造し、自らシステムプランニングを行い提供するメーカーだ。同社の製品は国内生産製造ながら低価格を実現しており、Webや展示会等では積極的に最新情報提供を行いコストパフォーマンスの高さをアピールしている。また、自社製品のみではなく、ユーザーが望む製品を技術的に咀嚼し提案を行うディーラーとして扱う面も持ち合わせており、その提案力に対する評価は各方面で高まっている。

ブースでは、豊富な製品群を6種類のコーナーにセグメント分けした展示が行われる。同社EVIN事業部 部長の池澤 和紀氏は「1コーナーごとにまったく違う特長を持った製品を数多く出していく。また、新製品のご紹介だけではなく、従来製品の価格改定のお知らせも併せて行う」としており、自社の扱い製品の幅広さと最新情報を積極的にアピールしていく狙いだ。誌面ではその中から幾つかピックアップしてご紹介する。

オーディオモニタ「SPシリーズ」の最新モデルを初公開

池澤氏が「一番の目玉」と話すのは、オーディオモニタ「SPシリーズ」だ。今年6月に発表されたばかりの同シリーズは「HD/SD/アナログ」、「HD/SD」、「HD/SD 4×1セレクタ付」、「アナログ」の4タイプを取り揃えている。会場では今月新たに追加された「プレミアムモデル」が初公開される。

機能を簡素化し、基本性能と信頼性、低価格を重視した従来モデルに対し、プレミアムモデルでは音質やVUメータの質の向上と、機能の充実が図られている。こちらのラインアップも4タイプで、共通の特長は次の通り。

- ・8ch、26セグメント3色LEDによる高精度レベルメータ (-60dB ~ +20dB)
- ・VUメータ、ピークメータ、ピークホールド機能
- ・5.1ch ダウンミックス機能
- ・全チャンネルにSDI マルチプレク

ス信号 (SP-PM11, SP-PM12)、AES/EBU 信号の有無表示

- ・AES/EBU 信号のD/A 出力 (8ch)
- ・2ch アナログ オーディオ信号ライン出力を装備
- ・D級パワーアンプの採用により、省電力化を実現
- ・アルミニウムの厚板を大幅に採用することにより、大音量時での共鳴音 (ビビリ) の押え込みと質量の軽減を同時に実現

また、機種によって、HD/SD-SDI、AES/EBU、アナログオーディオの入力信号に対応するなどの機能が備わっており、ブースでは詳しい話を聞くことができる。

SPシリーズについて池澤氏は「市場価格の半値で提案しているので、コストの問題でオーディオモニタの導入をあきらめているお客様からも注目して頂いている」と話している。



SPシリーズのプレミアムモデル

自主放送のHD化において実績を伸ばすキャラクタージェネレーターシステム「PX3D」

PX3Dは企画・開発段階から、あらゆる放送局、ポストプロダクションでの使用方法を検討し安定した運用をコンセプトとして開発された製品で、「Full HD対応」、「独自開発の3Dエンジン」、「リアルタイム処理」などに加え最新のコンピュータグラフィックス技術を取り入れ、制作から送出まで効率よく安定した運用が可能となる「All-in-One」パッケージ・キャラクタージェネレーター・ソフトウェアだ。

直観的なGUIで簡易な操作性を実現しており、ワンクリック操作で2D→3Dおよび3D→2Dに変換する機能や、簡便なキーフレームアニメーション編集、テンプレート活用による編集効率性の向上が図られている。特殊効果はOrganic、Particle、Wipe、DVE、Ripple等300種以上を内蔵している。

送出と編集が同時にできるので、例えば生中継にテロップを変更する場合でも送出の停止やモードの変更することなく対応が可能だ。また、チャンネル数を増やすことなく、テロップページを6枚重ねて送出制御することができる。これにより、複数のテロップ情報を別々に送出制御できるため、適切なタイミングでテロップのIN/OUTが可能となる。

ODBC機能を備えており、エクセルなどのデータベースとオブジェクトをリンクさせることができる。選挙速報などでこの機能を使えば、データベ



PX3D

スを更新、上書きすると、リンク先のオブジェクトの変数も同じく更新されるので、簡易かつ正確な変数更新が実現できる。

池澤氏は「1年前にリリースした製品で、CATV局における自主放送のHD化という流れの中で実績を伸ばしている」と説明する。

WDMを使ってあらゆるインターフェイスを1本の光ファイバで伝送

コスミックエンジニアリングが正規代理店を勤めるネットワークエレクトロニクス社の「Flashlink（フラッシュリンク）」は、WDMを使ってあらゆるインターフェイスを1本の光ファイバで伝送するオプティカルコンバータで、CATV局同士のコミュニティチャンネルの素材交換といった用途を中心に需要を増やしている。

Flashlinkの光伝送装置ラインナップは、P2P（ポイント・トゥー・ポイント）、2波長多重のWDM、16波長まで対応するCWDM、および40波長まで多重可能なDWDMを取り揃えており、様々な局

間伝送、中長距離をターゲットにした伝送に対応できる。また、アナログ、デジタル、ビデオ、オーディオ、RS422、10/100Base Ether、GbE、LバンドRF、FiberChannelなど、異なるビットレートストリームを多重して1本の光ファイバによる多チャンネルリアルタイム長距離伝送が可能だ。

また、システム管理・制御を行うためのWebブラウザを中心とする管理制御機能が充実していることにより、運用者の人的リソースを裂かなくて済むという利点もある。

コスミックエンジニアリング 営業部営業技術課 課長の中井 敦史氏は「販売実績に関しては毎年堅調な伸びを示しており、その中でも、CATV局の割合が大幅に増えてきている。主な用途は、近隣局同士のコミュニティチャンネルのコンテンツ流通、議会中継、情報カメラの素材伝送だ。弊社の役割としては、メーカー純正のものを提案するだけではなく、Flashlinkのモジュールを採用した、長期安定性、特に電源周りをケアしたシステムフレーム、い

わゆるコンパチのシステムを自社製作により対応している」と話す。

SDI・HDMI変換を低コストで実現するBlackmagic Design社の光のコンバータ

番組制作・放送に使うコンテンツの確認用のハイビジョンモニタとして、コストパフォーマンスの観点から民生用のモニタが使われるケースが多く、SDIからHDMI変換のコンバータの需要が増えている。また、家庭用のハンディカムカメラの映像を放送用途の編集機器といった既存の設備に取り込む際にもHDMIからSDI変換が必要になる。更には、各種変換と光伝送を組み合わせることにより局同士のコンテンツ集配を高効率で行える点にも、大きな期待が集まっている。

こうした用途で注目を集めているのが、コスミックエンジニアリングが扱う米国Blackmagic Design社の低価格ミニコンバータだ。この製品は、HD-SDI (3G)、SD-SDI、HDMI、HDアナログコンポーネント、NTSC、PAL、AES/EBU、アナログオーディオ、光信号を放送品質レベルで自在に変換する豊富な商品ラインナップを持つ。HD-SDI/光コンバータの標準仕様は伝送距離15kmから20kmのバージョンであるが、SFP光トランシーバを差し替えることで短距離用途、また80kmの長距離といった需要にも対応することが出来る。付属のACアダプタで繋げるだけで伝送できるが、コスミックエンジニアリングでは、そのまま収納してラックマウントできるアダプタを着けることで、より信頼性を高めるというコンバータ周辺機器の自社製品化も

行っている。

10km、20kmの映像伝送を双方向で出来る標準パッケージが1台約5万円という価格なので、対向で10万円程度のコストで構築できる。そのコストパフォーマンスの優良さから、6月のケーブルテレビショーでも注目を集めた。